

2008年度研究プロジェクト「19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究」

Research Project: A Comparative Study on the Idea of International Order  
in 19<sup>th</sup> Century East Asia

実施期間： 2006～2008年度（第3年次）

Term of the Project: 2006-2008 fiscal years (3<sup>rd</sup> year)

研究代表者： 吉田 忠 国際高等研究所フェロー・特別委員／東北大学名誉教授

Project Leader: Dr. Tadashi YOSHIDA, IIAS Fellow;

Project Representative on the IIAS Planning Board;  
Professor Emeritus, Tohoku University

研究目的：

19世紀東アジアにおいては、近代国家の創出が共通の課題であった。しかし、これら日本、中国、朝鮮の東アジア三国は、伝統的には華夷秩序思想の桎梏のもとにあったと言えよう。本研究の主眼は、この華夷秩序観から近代国家的对外觀、すなわち（西洋型）国際秩序観への転回の過程とその要因を再検討しようというものである。

東アジアの知識人が西洋型国際秩序を理解しようとした時、当然ながら従来の華夷秩序観との葛藤を経験せねばならなかった。ここでいう西洋型国際秩序とは国家間は主権・独立国家として対等の立場にあるという認識であり、同時に植民地を有する列強としての宗主国一属国と把握する秩序観を指している。前者を説く万国公法は、東アジア三国に受け入れられ、共通の認識が得られるはずであったが、華夷秩序観との距離感の差異により、同じ中国訳のテキストを参照しても、その理解は三国間で微妙に異なってくる。後者については、東アジアに存在していた上国一朝貢国との共通点と相違点をめぐって、多様な理解が交錯していた。西洋型国際秩序観に関するこれらの誤解と理解の過程を経て、東アジア三ヶ国の知識人は、以前とは異なる自己認識と相互認識をもつことになった。

そこで本研究では、日本・中国・朝鮮の近代思想史の専門家に研究会へ参加を仰いだ上、東アジアにおける西洋型国際秩序観の受容に関わる多様なテーマを探り上げてその具体像を分析したいと考えている。ただし、本研究会の「思想史」とは、研究テーマの特徴により、広い意味で使われている。19世紀東アジアの国際秩序観に関わる思想の領域は、今日の細分された学問の領域からみると、世界地理・国際法・国際政治など多岐にわたっている。そこで、本研究は、狭い意味の思想史研究者にとどまらず、幅広い専門分野の研究者の協力を得て、従来の専門領域への架橋を試みたい。

Objectives:

The idea of Chinese centrality (*Kai-kannen*) had traditionally defined the minds of the intellectuals among the three countries of East Asia, China, Japan and Korea. Having encountered with the new modern idea of international order among the nations, they had to experience the conflict between the old traditional idea above and the new idea brought from the West.

This study tries to shed a new light, through comparative studies, on the various facets of these experiences that the intellectuals from the three countries in East Asia had.

前年度までの研究の概要：

初年度は研究会コアメンバーの共通理解と問題意識を共有するために、先行研究と新研究動向のレビューも兼ね、時代もやや遡ってテーマを定めた研究報告会を4回もった。

第1回(2006年8月)は「新井白石の対外認識」と題し、5人が報告を行い、新井白石の国際秩序観についての集中的な討議を行った。白石にとって「中国」「朝鮮」が何を意味したか、また朝鮮燕行使との対比のなかで朝鮮通信使をとらえることにより、日本・朝鮮・中国の学術位相の差異が明らかとなった。

第2回(2006年9月)では「華夷秩序・華夷意識」をテーマに3人の報告と討論が行われた。まず、幕末維新期において、日本の三国的世界観、天下觀とともに華夷意識が転回し「政治帝国」が成立していく過程が考察され、また韓国における朝鮮中華主義の研究を批判的に検討し、燕行録の記事を通じて朝鮮中華主義の理念と現実を分析した。そして元旦朝賀儀礼を通して清朝の満蒙関係を考察し、そこで華夷秩序・意識とはほぼ無関係な世界観が存在したことが明らかになった。

第3回(2006年12月)は「東アジアにおける儒学・国学とその展開」をテーマに、明清交替をきっかけとする日本・朝鮮における自国意識の伸張や東アジア近代と国学、朝鮮における華夷秩序の問題を検討し、東アジアにおける思想状況の把握につとめた。

第4回(2007年3月)は「アヘン戦争と『海国図志』」というテーマで、中国、日本の近代を考えるうえで無視できないアヘン戦争のインパクト、その情報の伝達経路と内容、また当時の知識人に大きな影響を与えた『海国図志』の役割を分析した。

2年度もテーマを定めた研究報告会を4回もった。

第5回(2007年8月)は「19世紀の自他認識」というテーマで、中国・日本の自他認識の変容、勢力均衡の概念の史的展開などを論じた。総じて以上により、華夷秩序・華夷意識をはじめとする19世紀以前の思考の枠組み、状況への基本的スタンスが明らかとなった。

第6回(2007年12月)は、本研究会の課題の一つの柱である「万国公法」のテーマで、幕末から明治への同法の導入と適用、また西周によるオランダ留学の成果および同法の理解、近代朝鮮と万国公法について議論した。

第7回(2008年2月)は、19世紀日本の攘夷論の構造および中国を事例とする思想史方法論の再検討を行った。

第8回(2008年3月)は、「琉球と外交」をテーマに、異国船渡来と幕府の対応を背景にした琉球の位置づけ、および「琉球処分」における英字新聞を通じての明治政府のキャンペーンの実態と外交関係における翻訳の諸問題について論じた。

### Achievement:

We had four meetings focused on each specific topic in the first year, where foregoing researches and the state of the art were reviewed in order to share the understanding of the issues and problematic points among the core-members of this research group: the first on “Arai Hakuseki and his recognition of the world”; the second on “Kai-ishiki or Kai-chitsujo”(Chinese centrality vs. surrounding barbarian countries); the third on “Confucianism and National Learning in East Asia”; the fourth on “Opium War and *Kaikoku-Zushi*”.

As in the first year (2006 fiscal year), we also had four meetings for the second year; the fifth on “the recognition of self and others” where we discussed the transition of views of Japan towards China or vice versa; the sixth on “International Law” in which facets of Japanese acceptance and application of international law from the bakumatsu period through early Meiji were reviewed; the seventh on “the structure of anti-barbarian movement”; and the eighth on “Ryukyu and diplomacy” where having reviewed the bakufu policy toward the foreign vessels appearing off Japanese coast and Ryukyu islands, we have discussed the translation problems involved in diplomatic negotiations, especially in the case of Ryukyu.

キーワード: 華夷観念、国際秩序、万国公法、相互認識

Key Word: the idea of Chinese centrality vs. surrounding barbarian countries, international order, international law, mutual perception among East Asian three countries

### 研究計画・方法：

前2年度同様、テーマを定め年4回研究会を開催する。話題提供者を招き、問題点の整理と研究者間の議論を通じて、本共同研究の共通意識を醸成する。また最終年度であるので、研究成果報告を視野に入れて議論したい。テーマとしては、東アジア三国の相互認識、社会進化論、アジア連帯論、ナショナル・アイデンティティの形成と変容、を考えている。

### 研究会開催予定：

第1回：2008年8月初旬（於 高等研）

第2回：2008年9月中旬（於 高等研）

第3回：2008年12月下旬（於 高等研）

第4回：2009年3月初旬（於 高等研）

### 参加研究者リスト： 6名（◎研究代表者）

氏名	職名等
◎ 吉田 忠	国際高等研究所フェロー・特別委員／東北大学名誉教授 (科学史、洋学史)
姜 東局 (KANG Dongkook)	名古屋大学大学院法学研究科准教授（東洋政治思想史）
金 鳳珍 (Kim Bongjin)	北九州市立大学外国語学部教授（東アジア国際関係史）
佐藤 慎一	東京大学大学院人文社会系研究科教授（中国近代思想史）
前田 勉	愛知教育大学教育学部教授（日本思想史）
茂木 敏夫	東京女子大学現代文化学部教授（中国近代思想史）

### 話題提供者リスト： 8名

氏名	職名等
洪 宗郁	同志社大学言語文化教育研究センター専任講師
陳 力衛	目白大学外国語学部中国語学科教授
趙 寛子	中部大学人文学部歴史地理学科准教授
平石 直昭	東京大学名誉教授
川尻 文彦	帝塚山学院大学人間文化学部文化学科准教授
松田 宏一郎	立教大学法学部政治学科教授
區 建英	新潟情報大学情報文化学部教授
米原 謙	大阪大学大学院公共政策研究科教授

### 研究会開催実績：

第1回：2008年9月16日（於 高等研）

第2回：2008年12月19日～20日（於 高等研）

第3回：2009年2月21日～22日（於 高等研）

第4回：2009年3月5日～6日（於 高等研）

### 研究実績の概要：

本年度も4回研究会を開催し、最終年度であるので、これまで考察できなかったテーマを取り上げた。通算第9回（2008年9月）は東アジア三国の相互認識を話題とし、第10回（2008年12月）は、これまでの補遺として万国公法の翻訳問題や福沢諭吉の東洋政策論などを論じた。

第11回（2009年2月）は東アジアにおける進化論を主題とし、幕末から明治への社会進化の観点、

また梁啓超の進化論と国際秩序観などについて議論した。

最終回の第 12 回（2009 年 3 月）は、これまで論じられなかつたナショナル・アイデンティティの形成の問題を中心に、近代中国のナショナリズムと日本との関連、幕末から明治初期にかけての国体論、また中国における社会進化論と社会主义との関連などを論じた。

以上 3 年間、12 回の研究会により、19 世紀東アジアの国際秩序観を考察する際、社会進化論と万国公法が及ぼした影響が大きいことに注目した。半開としての東アジア三国が、文明国への転換を図ろうとする際、ヨーロッパで流行した進化論、それも社会進化論が半開から文明への道程の原理を提供した。三国はこぞってこれを受容しようとするが、いちはやく文明開化に成功した日本は、日露戦争の勝因を社会進化論で説明しようとした加藤弘之のように「強者の権利」として受け止められ、他方朝鮮では、当時の情勢下、弱者として淘汰されぬよう奮起を促すロジックとして社会進化論が用いられた。

また万国公法においても、俊敏にこれを学んだ日本は、朝鮮問題で中国と交渉するに当り、万国公法を活用して、朝鮮の自主独立を、中国に認めさせている。

#### Whole Achievement:

As in the previous years, we had four meetings on various topics: the ninth on “the mutual recognition of the three countries in East Asia,” ; in the tenth meeting we discussed on the problems involved in the translation of Wheaton’s *International Law* and the comparison between Chinese and Japanese versions, as well as on Fukuzawa Yukichi’s political ideas towards East Asia; the eleventh on “Social Darwinism in East Asia” , where we reviewed its acceptance from the bakumatsu period to early Meiji and Liang Ch’ i-ch’ ao’s understanding of Social Darwinism; and the last and twelfth on “the formation of national identity” , in which we have discussed the idea of *kokutairon* (national polity) and the Social Darwinism and socialism in China.

Throughout twelve meetings for three years, we have noted the importance of Social Darwinism and International Law when we consider our theme “the idea of international order in 19<sup>th</sup> century East Asia.”

For instance, having quickly adapted herself to modernization, i.e. the transformation from the half-civilized to the civilized country, Japan made full use of the ideas of Social Darwinism, which went as far as to justify the victory in the war against Russia, saying “the rights of the stronger,” while Korea had to encourage the people to stir up, lest they should be the prey of the stronger in the international arena of power politics.

Japan also fully utilized the International Law to convince China that Korea should be fully independent in her diplomatic negotiation with Chinese government.

研究成果報告書： 2010 年 3 月出版予定

担当： 中川副所長